参考１

平成２６年度　第１回愛知県生涯学習審議会会議録（要約）

１、開催期日

平成２６年９月８日（月）１３時５６分から１５時３２分まで

２、場　所

愛知県議会議事堂ラウンジ

３、出席した委員の氏名　１６名

足立誠、安藤正紀、大島伸一、恩田やす恵、木本文平、後藤澄江、志村貴子、鈴木照美、津浦純子、西山妙子、服部重昭、林寛子、牧野秀泰、松田武雄、山内晴雄、吉川佳代

４、欠席した委員の氏名　２名

小山たすく、加来正晴

５、会議に付した事項

議　題

(1) 平成２６年度愛知県生涯学習推進計画における主要な事業の進捗状況について

(2) 生涯学習推進計画における個別目標の進行状況について

(3) 超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について

６、会議の経過

○　会長・副会長の選出

委員の互選により大島委員を会長に、松田委員を副会長に選出

○　会議録署名人の指名

会長から志村委員と鈴木委員を署名人に指名

○　専門部会の設置

専門委員の選出について、会長一任とすることに決定

○　平成２６年度愛知県生涯学習推進計画における主要な事業の進捗状況について

事務局から説明

○　超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について

事務局から説明、質疑応答は別紙のとおり

【超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について】

〈各委員の意見要旨〉

○　男性は全体の２割ぐらいしかいないが、受講生からのアンケートでは、「情報がない」というものが多い。定年前には年金や就活などの話はあるが、その後の地域との関わりや市民による活動の話はほとんどない。**徐々に地域社会への関わりを深めていくためには、定年退職を迎えた方々への情報提供の働きかけが大事である。**

○　「超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について」ということで、まさに新しい時代に突入するということだと思う。資料では、どうやって高齢者を巻き込んでいくかという視点からの課題が記載されているが、新しい時代がやってくるのであり、**これからの高齢者が実際にどんなことを学びたがっているのか、ニーズ調査をしたらどうか。**

○　幸せに生の終わりを迎えるということも生涯学習の目的の一つになるが、医療あるいは哲学的な方面にまで踏み込んで考えていく必要があるのではないか。

○　次第に年老いていく中で、学びがどう変化していくのかという時間の経過の中での学習という視点が必要なのではないか。また、生涯学習においても、男女共同参画、女性の活躍も一つの課題になってくるので、**女性と男性が上手に力を携えて高齢社会における生涯学習を進めていくという視点も必要ではないか。**

○　高齢者が小学生の子どもたちによる発明クラブのお世話係をしている少年少女発明クラブというものがあるが、このような**成功例をモデルケースとして収集し、成功しているパターンを紹介するのも良い方法である。**

○　高齢者の孤独死や認知症、徘徊など社会問題化していることに対して福祉的なアプローチがなされているが、**福祉的ではない方面から、よりポジティブに社会で支えるにはどうしたら良いか、高齢者のマンパワーを活用するにはどうしたら良いかというように、プラスの方向で見ていくと考えやすいのではないか。**

○　これまで、高齢者は介護され、世話をしてもらっているような問題が多かったが、最近は高齢者自身がもっと社会貢献をしてみたいという気持ちを持っている。しかし、一方で社会の中にどのように入っていけば良いのか戸惑っているというデータもある。

○　社会の中にどう入っていけばよいのか戸惑うということは、既に社会と切れている、地域とのつながりが切れているということである。一生懸命やってきた世代が社会や地域とつながりが切れているということは、その次の世代はもっとつながりが切れているということである。これからの視点の一つとして、**若い世代に対して、もっと高齢者自身が働きかけていくという視点が必要なのではないか。**

○　少子化問題について、その対策として保育所の設置ということが言われるが、もっと若い世代が子育てをどうするのか、これからの社会をどうするのかを考えるとともに、若者に高齢者が働きかけていくような施策が行われると良い。

○　今の 75 歳は昔の 65 歳と身体的には同じ能力を持っており、年齢が 10 歳若返っている。昔の 60 歳といえば、おじいさん、おばあさんということであったが、今の 60 歳や 65 歳の方はおじいさん、おばあさんとはとても思えないほど元気である。**高齢者というものを勝手にイメージして、その実態からかけ離れてしまっているのではないか。**

○　**具体的な対策を考えるには、実態がどうなっているかを知っておく必要がある。**医学的、体力的な面と社会的な面と実態を総合的に見て、高齢者がいったいどのような能力を持っているのかをきちんと把握したうえで、対策を考えていかないといけない。

○　**高齢社会における最大の資源は高齢者であり、高齢者はそれぐらい大きな能力を潜在的に有しているので、これを活用しない手はない。**こういう見方をすれば、超高齢社会に対する見方が変わってくると思う。

○　生涯学習に関して、個に対して、どれくらい魅力的なものを提供できるか、それを受けて、それぞれの個がその能力や質を高めていけると、そこの町が魅力的になっていくというような個と町との循環を創り出す仕組みを作っていくことが必要である。**個にとって質の高い、みんながそこに参加したいと思えるためには、実態に見合ったプログラムの提供が必要であり、どういうプログラムを開発できるかが非常に重要である。**

○　高齢者の男性と女性とでライフスタイルがかなり異なってきたので、それに合わせ、**定年退職して地域に入っていく男性に見合ったプログラムをもっと開発していくことが必要ではないか。**

○　地域でいろいろな町づくりが行われているが、例えば教育の部門で育った人た

ちを受け入れる体制ができていない、受け入れ方が分かっていないという場合もあり、生涯学習で力を付けた方をどのように地域で受け入れるかという結び付きを作っていくのは行政の役割かと思う。

○　高齢者の方々に活躍していただくような生涯学習はもちろん重要であるが、次の世代が繋がっていくということが大事であり、**今の世代と次の世代との間に繋がりが生まれるようなプログラム作りや考え方が必要である。**

○　**愛知県が全国に先駆けて「愛知県モデル」のようなものを作って、超高齢社会のあるべき姿を見えるようにしていただきたい。**多様性を保持しつつも、生涯学習によって、だれもが幸せになれるような幅広い全体の絵を描けるようなビジョンを作っていただきたい。

○　元気な人から元気を奪わないような仕組み、仕掛けをどのように作っていくのか、そして倒れたら、気兼ねなく世話を受けられるような状況をどうやって作っていくのか。また、**寿命から言えば、これから高齢の女性が圧倒的に増加する社会になるが、男性・女性それぞれの特性に合わせて、どうやってその仕組みを作っていくのかということが大事で、「愛知モデル」としてどのように展開していくのかが求められている。**